

2.4. 保護者対象の調査結果について（単純集計）

本章では、「こどもの居場所に関する実態調査」（以下、本調査）における保護者対象調査の回答結果をもとに扱っていく。子どもをめぐる困り事に対して、親の立場から子どもに最適と考える相談や支援先の選択は喫緊の問題である。学校外の居場所を求める子どもを抱える保護者の実情を、本調査は映し出すと考える。

2.4.1. 回答者属性について

回答者属性については下表の通りである。本調査の対象とされる児童・生徒の通う校種については、「中学校」という回答が多く、次ぐ「小学校」という回答と合わせて8割を超える回答であった。あわせて学年の集計結果からは、「中学2年」19.8%、「中学3年」18.0%と、「中学1年」（13.2%）と、中学生のみで半数を超えることが読み取れる。

対象となる子との続柄については母親からの回答がほとんどであり、本調査の保護者の意見は母親による意識を反映したものと受け止められる。対象児童・生徒の欠席日数を問うた結果については、「180日以上」（47.5%）という回答が半数近くにのぼり、「20～60日」（20.1%）がそれに次ぐ回答であった。保護者として本調査の回答者が抱えている現状を踏まえた貴重な意見を聴取できる結果であることを記しておく。

表 2-4-1 調査対象の属性（子どもの通う校種と管轄）

圏域	度数	パーセント	
鹿児島地域振興局	292	43.2	
南薩地域振興局	54	8.0	
北薩地域振興局	76	11.2	
姶良・伊佐地域振興局	120	17.8	
大隅地域振興局	61	9.0	
熊毛支庁	17	2.5	
大島支庁	44	6.5	
不明	12	1.8	
合計	676	100.0	

対象児童・生徒校種	度数	パーセント	有効パーセント
小学校	248	36.7	37.1
中学校	336	49.7	50.2
高校	64	9.5	9.6
特別支援学校	23	3.4	3.4
私立学校	1	0.1	0.1
国立小中学校	2	0.3	0.3
不明	2	0.3	100.7
合計	676	100.0	

表 2-4-2 子どもとの続柄

子との続柄	度数	パーセント	有効パーセント
父	42	6.2	6.2
母	624	92.3	92.7
祖父	0	0.0	0.0
祖母	2	0.3	0.3
その他	5	0.7	0.7
無回答	3	0.4	100.0
合計	676	100.0	

表 2-4-3 調査対象児童・生徒の学年

対象児童・生徒学年	度数	パーセント	有効パーセント
小1	10	1.5	1.5
小2	24	3.6	3.6
小3	31	4.6	4.6
小4	53	7.8	7.9
小5	56	8.3	8.3
小6	81	12.0	12.0
中1	89	13.2	13.2
中2	134	19.8	19.9
中3	122	18.0	18.1
高1	27	4.0	4.0
高2	32	4.7	4.7
高3	15	2.2	2.2
無回答	2	0.3	100.0
合計	676	100.0	

表 2-4-4 欠席日数

欠席日数	度数	パーセント	有効パーセント
20～60日	136	20.1	20.8
60～90日	89	13.2	13.6
90～120日	54	8.0	8.2
120～180日	55	8.1	8.4
180日以上	321	47.5	49.0
無回答	21	3.1	100.0
合計	676	100.0	

2.4.2.学校外の相談先と各種相談・支援機関の利用状況

問2以降では学校の教員以外への相談機関・支援機関への相談についての現状を把握する質問を設定した。相談・支援機関の利用状況については525人（77.7%）が利用経験について利用したことがあるという回答を寄せている。

表 2-4-5 相談・支援機関の利用経験

相談・支援機関利用	度数	パーセント	有効パーセント
ある	525	77.7	78.2
ない	146	21.6	21.8
無回答	5	0.7	100.0
合計	676	100.0	

問3-1は、利用経験のある回答者（525人）のみを対象に具体的な相談機関・支援機関の利用の有無についてたずねたものである。

機関により、利用機会の有無に違いが見られるが、これは、相談や支援の内容によって利用先が異なることや、相談と支援の時間的な段階の移行に伴って利用先が変遷していくことも踏まえて見る必要がある。

結果からは、最も利用が多いものは「医療機関」62.5%、「スクールカウンセラー（SCと表記）」の56.8%が利用者の中で半数を超えている。これらは相談の時点での利用であると考えられ、その後の支援の段階での利用については「放課後等デイサービス」24.0%、「スクールソーシャルワーカー（SSWと表記）」が22.5%、「フリースクール」20.2%と続く。

問3-3は問3-1の相談・支援機関への非利用者のみを対象に「利用しない（したことがない）」理由をたずねた結果である。先に利用率が高かった「スクールカウンセラー」「医療機関」と、「フリースクール」を除く相談・支援機関において共通しているのが「知らなかった」の割合の高さである。そこには、情報が届いていないという内容や自身や子どもの状況から適した相談や支援機関の選択がしにくいなど、様々な要素が含まれると考えられる。

問3-4は問3-3で「知らなかった」という回答者のみを対象に、知っていたとしたら各相談・支援機関について利用していたかどうかをたずねた質問である。「スクールカウンセラー」や「スクールソーシャルワーカー」、「医療機関」、「フリースクール」については利用が視野に入るか検討の俎上に上がっているのに対して、行政の機関については検討止まりか利用しない回答が多く、利用促進には一層の周知が求められると考えられる。

表 2-4-6 相談・支援機関別利用経験

3-1 相談・支援機関利用経験

	利用	非利用	無回答
ア. SC (n=530)	301	175	54
%	56.8	33.0	10.2
イ. SSW (n=530)	119	310	101
%	22.5	58.5	19.1
ウ. 医療機関 (n=530)	331	127	72
%	62.5	24.0	13.6
エ. フリースクール (n=530)	107	326	97
%	20.2	61.5	18.3
オ. 放課後等デイサービス (n=530)	127	300	103
%	24.0	56.6	19.4
カ. 市町村教育支援センター (n=530)	105	316	109
%	19.8	59.6	20.6
キ. 鹿児島総合教育センター (n=530)	30	382	118
%	5.7	72.1	22.3
ク. 市町村教育委員会 (n=530)	93	317	120
%	17.5	59.8	22.6
ケ. 鹿児島県子ども総合療育 センター (n=530)	68	348	114
%	12.8	65.7	21.5
コ. 鹿児島県精神保健福祉 センター (n=530)	1	404	125
%	0.2	76.2	23.6
サ. かがしま子ども・若者総合 相談センター (n=530)	17	392	121
%	3.2	74.0	22.8
シ. 児童相談所 (n=530)	49	368	113
%	9.2	69.4	21.3
ス. 子ども家庭支援センター (n=530)	34	377	119
%	6.4	71.1	22.5
セ. 指定障害者相談支援事業 (n=530)	45	367	118
%	8.5	69.2	22.3
ソ. 子ども食堂 (n=530)	32	373	125
%	6.0	70.4	23.6
タ. その他 (n=530)	71	240	219
%	13.4	45.4	41.4

表 2-4-7 問 3-2 その他（自由記述）

- ・市役所こども相談
- ・警察署
- ・不登校保護者の集い
- ・不登校保護者及び障がい児向けのサークル活動（ボランティア・市民活動）
- ・学習支援（生活困窮者自立支援事業）
- ・県外のフリースクール
- ・ペアレントトレーニング講座
- ・習い事
- ・地域活動
- ・子ども第3の居場所
- ・個別指導塾
- ・家庭教師
- ・生命保険の電話相談
- ・SNSでの相談

表 2-4-8 相談・支援機関への非利用の理由

3-3 相談・支援機関非利用理由	子ども 嫌がる	他の機関 利用	利用料高い	自宅から 遠い	知らな かった	無回答
ア. SC (n=175)	52	71	1	1	28	22
%	29.7	40.6	0.6	0.6	16.0	12.6
イ. SSW (n=310)	45	85	0	1	143	36
%	14.5	27.4	0.0	0.3	46.1	11.6
ウ. 医療機関 (n=127)	34	30	4	5	26	28
%	26.8	23.6	3.1	3.9	20.5	22.0
エ. フリースクール (n=326)	87	55	66	30	52	36
%	26.7	16.9	20.2	9.2	16.0	11.0
オ. 放課後等デイサービス (n=300)	72	67	3	10	100	48
%	24.0	22.3	1.0	3.3	33.3	16.0
カ. 市町村教育支援センター (n=316)	48	69	1	13	133	52
%	15.2	21.8	0.3	4.1	42.1	16.5
キ. 鹿児島総合教育センター (n=382)	26	72	2	63	174	45
%	6.8	18.8	0.5	16.5	45.5	11.8
ク. 市町村教育委員会 (n=317)	36	85	2	7	137	50
%	11.4	26.8	0.6	2.2	43.2	15.8
ケ. 鹿児島県子ども総合療育 センター (n=348)	25	75	0	55	150	43
%	7.2	21.6	0.0	15.8	43.1	12.4
コ. 鹿児島県精神保健福祉 センター (n=404)	21	79	2	53	202	47
%	5.2	19.6	0.5	13.1	50.0	11.6
サ. かごしま子ども・若者総合 相談センター (n=392)	22	80	1	50	194	45
%	5.6	20.4	0.3	12.8	49.5	11.5
シ. 児童相談所 (n=368)	33	109	1	23	150	52
%	9.0	29.6	0.3	6.3	40.8	14.1
ス. 子ども家庭支援センター (n=377)	34	82	1	10	198	52
%	9.0	21.8	0.3	2.7	52.5	13.8
セ. 指定障害者相談支援事業 (n=367)	27	74	1	10	202	53
%	7.4	20.2	0.3	2.7	55.0	14.4
ソ. 子ども食堂 (n=373)	62	74	2	16	163	56
%	16.6	19.8	0.5	4.3	43.7	15.0

表 2-4-9 相談・支援機関の利用希望

3-4 相談・支援機関利用希望	利用していた	検討した	利用しな かった	無回答
ア. SC (n=28)	6	9	7	6
%	21.4	32.1	25.0	21.4
イ. SSW (n=143)	21	82	27	13
%	14.7	57.3	18.9	9.1
ウ. 医療機関 (n=26)	1	19	4	2
%	3.8	73.1	15.4	7.7
エ. フリースクール (n=52)	4	30	12	6
%	7.7	57.7	23.1	11.5
オ. 放課後等デイサービス (n=100)	6	44	40	10
%	6.0	44.0	40.0	10.0
カ. 市町村教育支援センター (n=133)	8	66	42	17
%	6.0	49.6	31.6	12.8
キ. 鹿児島総合教育センター (n=174)	8	61	93	12
%	4.6	35.1	53.4	6.9
ク. 市町村教育委員会 (n=137)	4	64	56	13
%	2.9	46.7	40.9	9.5
ケ. 鹿児島県子ども総合療育 センター (n=150)	7	59	78	6
%	4.7	39.3	52.0	4.0
コ. 鹿児島県精神保健福祉 センター (n=202)	8	84	101	9
%	4.0	41.6	50.0	4.5
サ. かごしま子ども・若者総合 相談センター (n=194)	7	84	92	11
%	3.6	43.3	47.4	5.7
シ. 児童相談所 (n=150)	4	59	73	14
%	2.7	39.3	48.7	9.3
ス. 子ども家庭支援センター (n=198)	8	106	71	13
%	4.0	53.5	35.9	6.6
セ. 指定障害者相談支援事業 (n=202)	5	62	114	21
%	2.5	30.7	56.4	10.4
ソ. 子ども食堂 (n=163)	3	63	87	10
%	1.8	38.7	53.4	6.1

2.4.3.フリースクール、放課後等デイサービスの利用状況について

問4以降の質問は、問3-1の「フリースクール」「放課後等デイサービス」の利用者を対象に、利用状況等についてたずねたものである。「フリースクール」「放課後等デイサービス」を知ったきっかけについては表2-4-10の通りである。利用のきっかけとしては「その他」を除くと「インターネット経由」での情報入手が多く、「知人から」、「公的機関から」の情報提供がそれに次ぐ。

表 2-4-10 フリースクール、放課後等デイサービス利用のきっかけ

4-1 フリースクール・放課後デイ 利用のきっかけ	度数	パーセント	有効パーセント
学校からの紹介	21	10.2	10.2
市町村教育支援センターからの紹介	3	1.5	1.5
SC/SSWからの紹介	4	2.0	2.0
公的機関からの紹介	25	12.2	12.2
知人からの紹介	34	16.6	16.6
インターネット（ホームページ等）で見つけた	48	23.4	23.4
事業所のチラシ	6	2.9	2.9
その他	58	28.3	29.3
無回答	6	2.9	100.0
合計	205	100.0	

施設を選んだ理由について1位から3位まで順位をつけた回答結果では、1位で最も割合が高い回答は「子ども自身が決めた」であり、2位の「施設の雰囲気」、3位の「自宅からの近さ」への回答割合の高さを総合すると、継続的に利用できる距離感と子どもの自主性に任せた選択が、施設利用において保護者が重視するポイントであることが示されている。これらの順位を総合的にまとめるべく、1位の度数に3点、2位の度数に2点、3位の度数に1点をかけ、重み付けを行ったうえで全ての集計を行い、選択肢の順位を割り出したところ、「子ども自身が決めた」265点、「施設の雰囲気」178点、「自宅からの近さ」145点、「学習内容」82点であった。

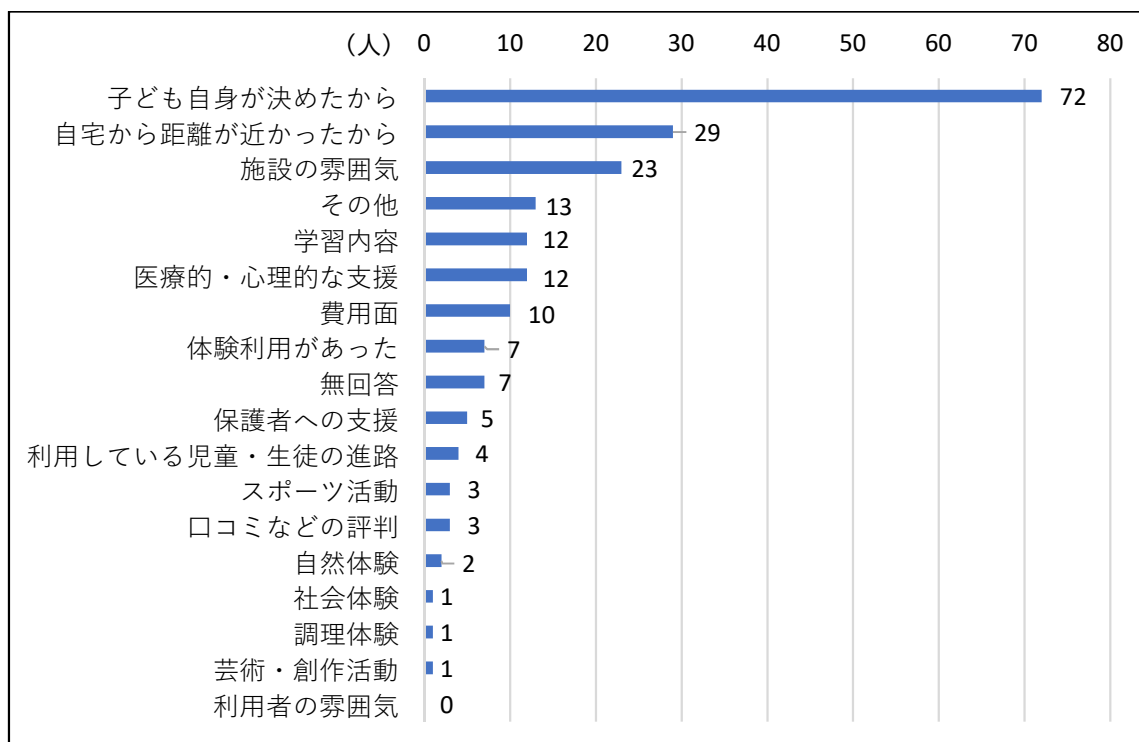


図 2-4-1 施設利用の理由（1 位）

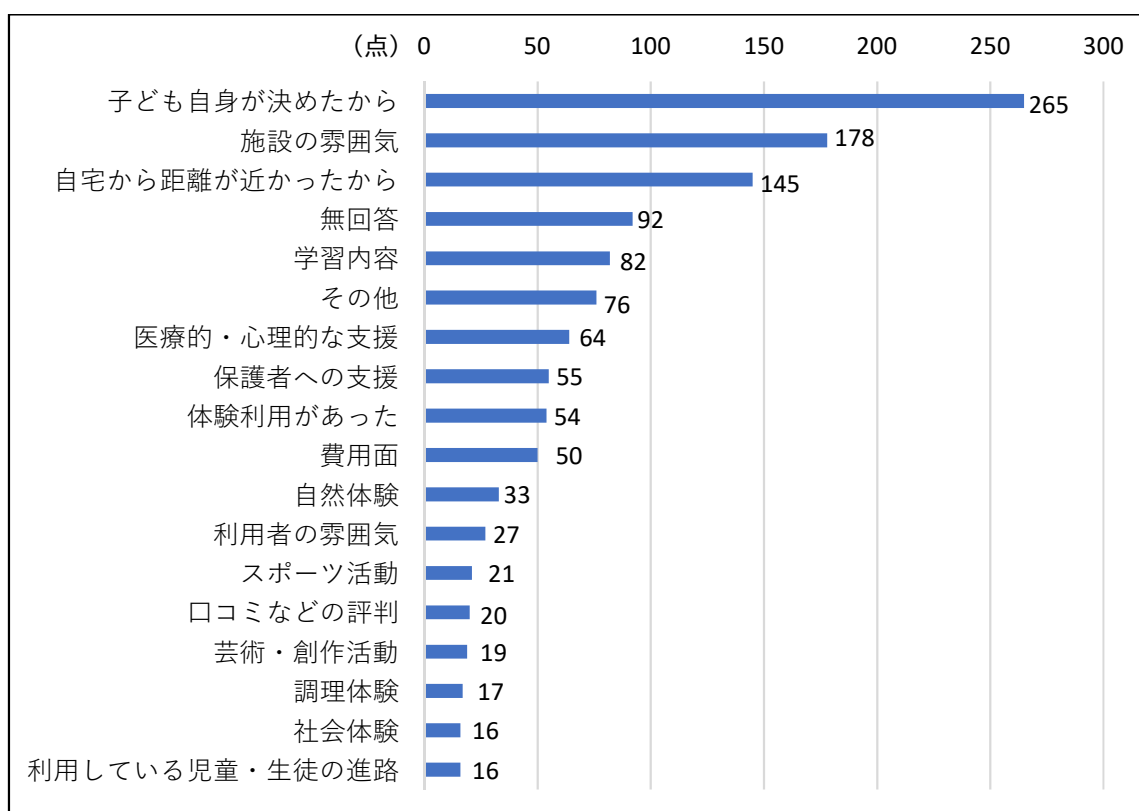


図 2-4-2 施設利用の理由（1～3 位の得点別順位）

施設を選んだ理由について、その他を回答した内容は、表 2-4-11 のとおりとなる。

・ 17 を選んでいませんが、補足として、子供に対する評価の仕方、学習ということはどう捉えているかなど根本的な部分で公教育とは異なる形であった事が大きいです。我が子に合っている場所を選んだことで親子ともストレスなく居られています。
・ 自宅まで訪問し話をしてくれるから
・ 経済面はとにかく子どもが喜んで通える事、引きこもりにならないことを優先した。
・ 学校では学べない体験が出来そうなところだった。
・ 実際、子どもが利用したことはない。 私達、親が子どもの相談のカウンセリングをした際に放課後デイサービスもありますよと紹介されただけ。利用したことはない。
・ 妹も利用していたから。
・ 紹介
・ 不登校支援や通信制の学校の案内等あったから
・ 学校を経由して時間の都合を調整でき、また学校で面談だったため
・ 母親がうつで訪問診療を受けており、担当医が息子を心配してくれたので、一緒に診てもらう事にした
・ 自宅への送迎。
・ (施設名) へ通っています(放課後支援センター) いろいろなところへ、まず体験をさせてもらって、通えそうなところを見つけました。 学習もできて、いろんな体験のできるところです
・ 子供の状態に合わせて体験だったり運動だったり学習だったり都度工夫して対応してくれる所だったので子供もやってみる気になってくれた。
・ 学校にその様な施設があると聞いたので。
・ フリースクールなど見学に行ったが本人が行きたい場所が見つからない上にそもそも鹿児島には、選択肢が少なすぎる。当時は放課後デイしか頼れる場所が見つからずそこにするしかなかった。もちろん経済的な面も大きかった。
・ ネットだったので。
・ 出席日数にカウントされるから
・ 元々は、通っていたこども園の学童を希望していたが、説明会の用紙すら貰えず拒否された。色んなことを相談していた保健センターで、放デイというものもあることと他の学童を紹介されたことがきっかけとなった。
・ 選択肢が少ない。近くで利用できるのがそこしかない。
・ 日中出れる場所がそこしかなかった
・ 行政の理解や協力もなかったなので、最初は 2 名の子どもだったが、最大 8 名まで集まりました。魚釣り、畑、木登りや運動をメインに、ゲーム大会や体験学習にもとりくみました。
・ 子供自身が体験をして、行く事を選択したから。

・まずは頑張らなくていいと親子供、認めてくれた。今の状況をキープしよう。そこからでいい。あせらなくていい。この言葉が決め手。14は下の子が先に放デイで利用した。
・お姉ちゃんも通っていたので。
・先生方と子供の相性が良さそうだった
・友人からの紹介
・学校以外であれば教育支援センターしか選択肢がなかったため。
・先生の対応
・子供自身が、支援員の皆さんから愛情を感じたからだと思います。温かい心で迎えてくださってとても嬉しかったのだと思います。
・養護教諭よりこの施設の取り組みが子にいい影響を与えてくれるのではないかと言う言葉があったため。
・施設の先生方のお誘いがあって二つ目は決めました。
・担当の人柄
・兄弟が利用していたので。
・公的な相談機関からの紹介
・療育の時から通っている事業所の放デイで、信頼があったから
・魚に興味があった為、水族館に行くという理由もあり。
・同じ境遇、同年代の子供同士で集える場が良かった。
・担任の紹介だった
・医師に知り合いがいて、相談ができ、受診につながったから。
・相談前に、ホームページやインスタで、実際の活動様子を見ることができたから
・運営者の考えと、人となり
・送迎、自宅での対応も可能との事だった為。
・保育園の系列で自発を利用して、放課後デイもあったため
・松元（春山）から通える場所が少ない。というかほぼない。選択肢がない！！行ってみたい通いたい所は市内中心部であったり、地方すぎてとてもじゃないけど、仕事をしながら通うことができない！！地方にも通える所選択肢を下さい。
・子どもの気質や特性に理解があったから
・以前、居住していた支援センターからの紹介。
・子どもの相談。居場所の情報を知りたかった。
・自宅までの送迎サービスがあり、離職しないですむとおもったから
・外遊びをおもいきりさせてくれ、初めて行ったときから冬なのに汗だくになるまで遊んでとてもイキイキとしていたから
・放デイだか、不登校の子が行ける枠(10時→11時40分。13時30分→15時10分)があった。

・地元にはフリースクールが1つしかなかったため。（不登校中の子供の居場所）
・かかりつけ医にカウンセリング外来があったので本日1/10(金)初めて相談したので、これから先の事はまだ決まっていない
・利用先への信頼感
・送迎の有無
・10.医療的・心理的な支援。予約中のため、2月末
・何らかの支援が必要ということを役場から勧められたから。
・学校の担任からのすすめ
・子どもの好きな活動内容があり、居場所として理想的だったから。
・学校で勧められた。
・フリースクールを営んでくれている先生が素晴らしかったので！人間性で選びました。お話も、心に響くので、子供も心を開いてくれます。
・新たに設置されたから。
・同じ不登校の子供を持つ親が運営していたから。
・知人が勤務しており信頼できたから

表 2-4-11 問 4-3 その他（自由記述）

施設利用頻度についての回答結果は表 2-4-11 で示すとおり「週1～2回程度」と回答した有効回答で6割あり、最も多かった。

表 2-4-11 施設の利用頻度

4-4 施設利用頻度	度数	パーセント	有効パーセント
週1～2回程度	113	55.1	60.4
週3～4回程度	32	15.6	17.1
週5～7回程度	42	20.5	22.5
無回答	18	8.8	100.0
合計	205	100.0	

施設利用にかかる費用（月額）についての回答は、表 2-4-12 で示すとおり「無料」が最も多く、45.0%であるが、2万円以上も12%であった。なお、回答は自由記述のため、特徴的な記載は表 2-4-13 に示しているが、表 2-4-13 の内容も表 2-4-12 に反映している。

表 2-4-12 フリースクール等の施設利用にかかる費用（月額）

4-5 利用にかかる費用（月額）	度数	パーセント	有効パーセント
無料	90	43.9	45.0
5000円以下	65	31.7	32.5
5000円～10000円	14	6.8	7.0
10000円～20000円	7	3.4	3.5
20000円～40000円	18	8.8	9.0
40000円超	6	2.9	3.0
無回答	5	2.4	100.0
	205	100.0	

表 2-4-13 問 4-5 その他（自由記述）

・ 入学金 15 万、年会費 12 万、月謝 53,000
・ フリースクール自体は無料
・ 放課後デイのため交通費のみ
・ 0 円 利用時にかかる交通費や材料費はあり
・ 15000 円+バス代 1 万
・ 4 万円と諸雑費。学童代 6000 円や、体験にかかる費用や交通費は自己負担
・ 診療 2280 円/回、カウンセリング 1500 円/回
・ 施設 1・無料／施設 2 ・おやつ代程度 300 円～
・ まだ集金がない為不明
・ 月一回利用。 2200 円くらい。
・ 40,000 円+年会費等・教材
・ 2 か所利用しており、1 つはお弁当を注文したらお弁当代（約 480 円） もう 1 か所はおやつ代が 1 回 50 円なので、月によって異なる
・ 移動手段（車）のガソリン代。往復 2 0 km
・ おやつ代約 1,000 円
・ 4 千円程度（他の兄弟も利用しているため経済的負担が大きく利用を断念しようと思ったことがあります。）
・ 4 万円/月（週 5 日） 1 日チケット 3,000 円/1 回
・ 四万円学費、その他諸経費は自前
・ 寄付制
・ 1 ヶ月 4 千円（施設名）+入学金+親の会費+交通費=約 5 万円くらいです。/月 高いです。
・ 0 円。活動がある時のみ必要経費がかかります。（例：野外活動など）
・ 利用料：0 円／月 おやつなど：0 ～1,000 円／月
・ 交通費 1 カ月、1800 円ほど
・ 薬代も含めて 3、4000 円？入院もしたのでもっと費用がかかる月もあった。
・ おやつ代 いった回数×50 クッキングあった時 300～400 円

・ 800 円（駐車場代）
・ 2～3 回参加後は行けなくなり保護者相談のみ 0 円
・ 施設利用料 0 円 弁当代 3,000～4,000 円/月
・ フリースクール 35,000 円/週 3 日（月） （施設名） クッキング、森活動 無償の時もある大変助かっている。（平均 300 円程度/回）
・ 年に 2 回程度 1,000 円程度（募金してくる形）、本来は無料
・ 診断書料のみ
・ 医療機関に 2 週間に 1 回です。 約 6,000 円
・ 利用には費用は掛からないが、正社員としての給料がなくなったので家庭の収入が減った。お弁当代とガソリン代の経費がかかっている。
・ 月 ¥ 40000 円 + 雑費・教材費 ¥ 2000～3000 + 行事費 ¥ 5000 + 駐車場代 ¥ 3000
・ 放課後等デイサービスは無料で利用しています。 キャンプや外出などの活動は実費
・ 外出等の際の交通費や食費のみ
・ 3000 円/月 クリニック受診、カウンセリング
・ 学費 4 万(1 か月) 通学の交通費 約 1 万 5 千円(1 か月)
・ 授業料 4 万 + ガソリン・駐車場代 1 万 5 千 = 55000 円/月
・ 施設自体への利用料は、施設の主旨が、「経済状況に関係なく利用したい子供は利用できる」なので 0 円です。
・ 週 5 の時は 40000 円/月 + 給食費 200 円、別途年間施設料金含めて 42000 円/月

2.4.4.施設利用による子への影響・変化

施設利用による子への影響としてどのような変化が見られたか 1 位から 3 位まで順位を付けた回答結果では、1 位と 2 位の回答で「居場所を得ることができた」が最も多く、1 位の他の回答では「施設スタッフとのコミュニケーションが増えた」や「外出の機会が増えた」が続いた。

これも 1 位の度数に 3 点、2 位の度数に 2 点、3 位の度数に 1 点をかけ、重み付けを行ったうえですべての集計を行った結果が図 2-4-4 である。

支援施設が提供する内容としては、第一に居場所の獲得による安心感であり、それにより対人関係に自信が戻り外出機会の増加につながるという支援の目指す歩みが保護者に感得されていることが示されているといえよう。

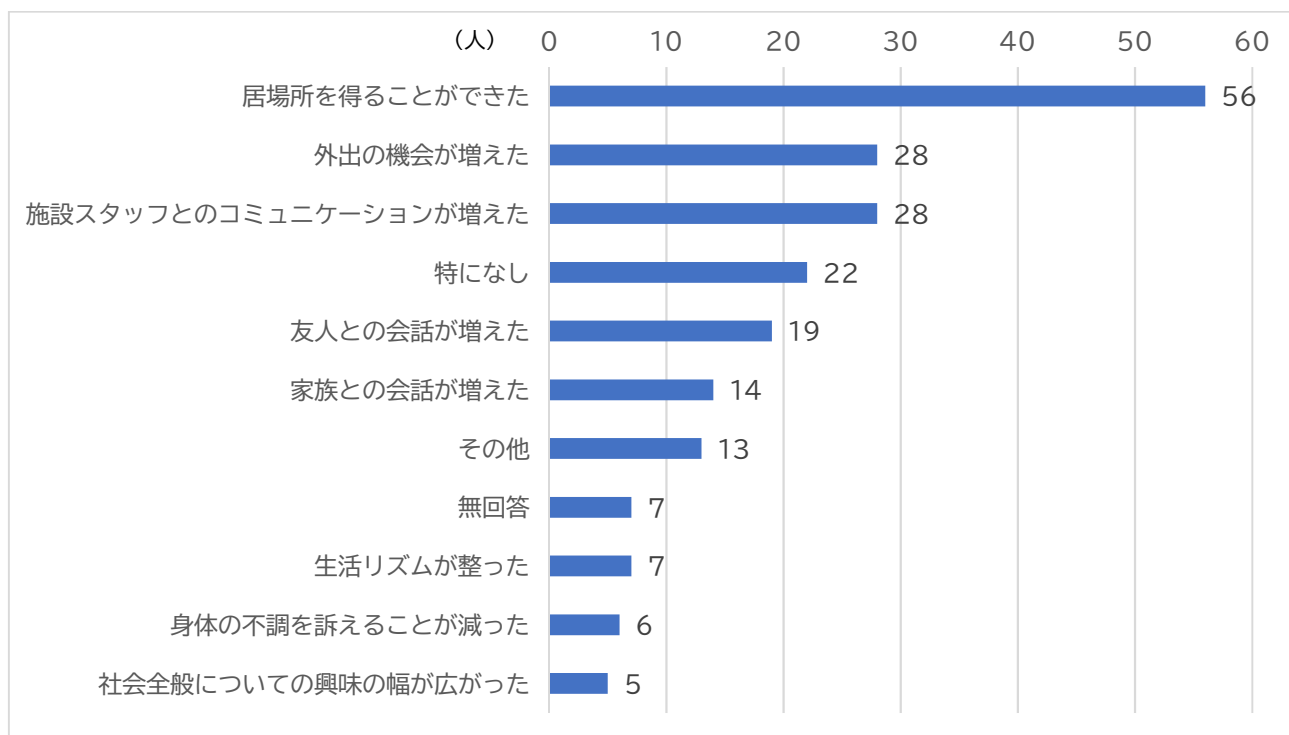


図 2-4-3 施設利用による子の変化（第 1 位）

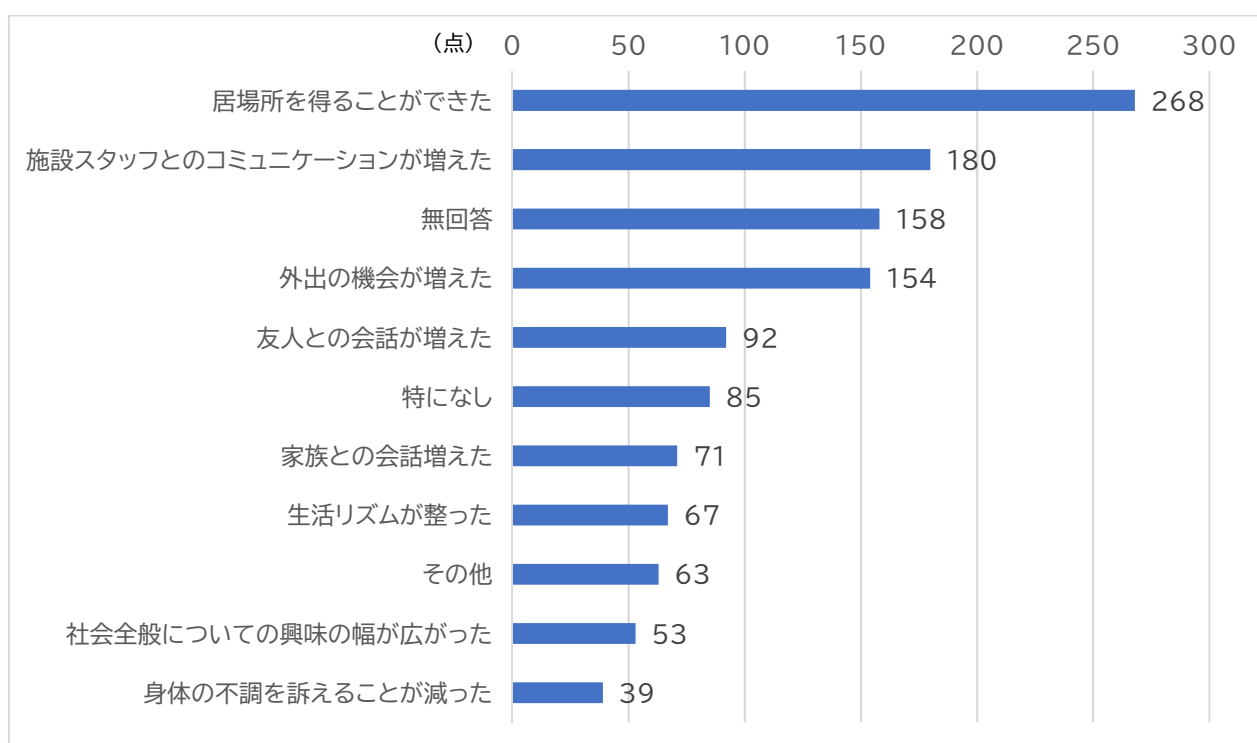


図 2-4-4 施設利用による子の変化（第 1～3 位の得点別順位）

施設利用による子の変化について、「その他」の回答内容は、表 2-4-14 のとおりとなる。変化が見られた意見もあるが、変化を感じられない意見もある。

・学習面の遅れが見られますが、先生の配慮、周囲の理解、学校の方針のおかげで、それでも「学ぶことが楽しい」と言っています。よく間違えますし、間違えるとすぐ気持ちがグシャグシャになるところはあるのにです…。
・学校に行けるようになった
・好きなことや特技を見つけることができて、自信がついた様子だった。
・自分が学びたい事を学べるというところが良いと思いました。 大人数ではなく、少人数での学習というところも良いところでした。 沢山の人の中で学習するのが、苦手な子には、とても良い環境だと思います。 もっと、たくさんの施設があれば良いかなと思います。自宅から近いともっと通えたのにはと思いました。
・自分のリズムで出来る事が増えた。
・他の学生（他校）とのコミュニケーションができる ・苦手な学生がいると行けなくなる。数学の時方で塾と支援スタッフの教え方に違いがあったことで混乱し、それ以降全く行けなくなり利用を辞めた。
・同じような境遇のお友達ができて、本人も安心してきた。
・変化がよく分からない
・人との関わりをがんばっている 勉強しようとしている 社会と少しずつつながろうとしている。受験と向き合いつつある
・子供、親も、悩んでいるのは自分だけではない・・・と思えた
・放デイも本人にとって本当の居場所になっていたわけではなく、行ったり行かなかったりなかなか安定しなかったが、途中で友達が出来て活動が楽しくなった時期もありました。が、高学年になるにつれ、友達がやめたり、引っ越したりしていくと行かなくなりました。
・明るくなった。 自己肯定感が少し高まった。
・得意なものへの興味が制限されなくなったので、動画撮影などたくさん取り組むことができて才能が伸びました。
・人と関わる事ができてるので、家にいるよりはいろんな面でいいと思います
・バスに 1 人で乗れるようになった
・料理を作る楽しさを知った。（一時的だが）
・親でも学校の先生でもない第 3 者の立場で「自分の話を何でも聞いてくれる人」ができたことで、安心感やストレスを吐き出せるようになった。センターへ行ってカウンセラーの方と話をするたびに表情が明るくなった。
・学校（代）に行けているという自信から心が安定した。行けていない罪悪感をぬぐえた。
・小学校から利用しているが、学校へ登校できなくなると放デイも利用していない。相談には伺っている。

・まだ1度しか利用したことがないため、特に変化はありません。
・色々な経験を積む事ができ、社会性や成功体験を得る機会の場になっている
・特に2と6ですが、1～8全てにおいて変化が見られました。そのうち自然と学習意欲も出てきて、自ら受験の事も考え目標を持ち、勉強に取り組む様になりました。
・体調管理により努めるようになった
・不登校をしている自分自身を卑下することがなくなった。色々な体験を通して、学校とは何か？勉強とは何か？先生とは何か？とふかんして見れるようになった。かけがえのない友達ができた。社会勉強が出来ている。
・対人関係に少し自信がついた
・来週からの利用なのでまだ分からない
・まだ通所し始めたばかり
・放デイに行くことも今は頑張っている状況です。行かなくて良いなら休みたいそうです。現状も休みがちです。
・子供の大人への不信感が上がった。
・保護者の相談のみの利用だったため、子どもは直接利用していない いつか、子どもが動き出せるようになったときのために、利用できる施設を知っておきたかった
・元の元気な娘に戻った
・同じような休んでしまっている学生と接する中で、自分なりをまた見つめ直す機会にもなったようだった
・行く気にはなったが、負担になり行けなくなった。
・学校には行かないけど、毎日休まず放デイに通っていた。 多少体調不良でも放デイには通っていた 笑顔も増え、会話もさらに増え楽しくて仕方ないというのが伝わってきた。 1分でも早く放デイに行きたいようでした。
・神経過敏なところが、少し緩和した。勉強も少しやってくれるようになった。母子分離不安が軽減して、放デイは1人で行けるようになった。離れてくれる時間が出来たので、レスパイトや家事、仕事に割ける時間が出来た。家族のメンタル安定にもつながっている。学校との連絡もらせてくれている。運動や子ども達同士の交流が出来ること中心に活動を、組んでくださっているの、ストレス発散やコミュニケーションの練習になっている。
・知らない人に囲まれて過ごしたため、帰宅後そのストレスから八つ当たりがあった。
・利用を拒むようになった（外出して知っている人に会うのが怖い）
・本人は学校への復帰を希望していたので、利用には至らなかったが、保護者は座談会などで同じ境遇の方と話が出来たことにより、安心できた。子供が利用した訳ではないので変化はない。
・明るくなった。今後の事を考える元気が出てきて、意欲が戻ってきた。特に、今年から通っている、カウンセリングがとても良かったようで元気になっています。

・学校に行けなくなったことを本人がとても気にして、よく泣いたりしていたし、とても暗かった。放デイに通い始めて明るくなった。
・日々のストレスが少なくなり、家庭でも、活き活きとメリハリが出来てきた。
・少しずつ勉強に対してやる気が出てきた

表 2-4-14 問 4-7 その他（自由記述）

2.4.5.子にとって好意的とされる活動内容

支援施設では様々な活動が用意されており、学習面の支援に加えて、各種活動を通して対人関係を構築するプログラムなどが提供されている。そのような活動内容のうちで子にとってやってよかった、子どもが積極的に取り組んでいた、子どもが楽しんでいたと保護者視点で受け止められている活動内容について1位から3位までの回答結果から、1位の回答で「子ども同士で遊ぶ活動」の割合が高く、2位と3位では「調理体験」が高い割合を示した。保護者にとっては、利用者同士で他者と協同して活動するメニューに好意的な評価を寄せていることが伺える。これも得点化による順位づけを行った結果を図示する。

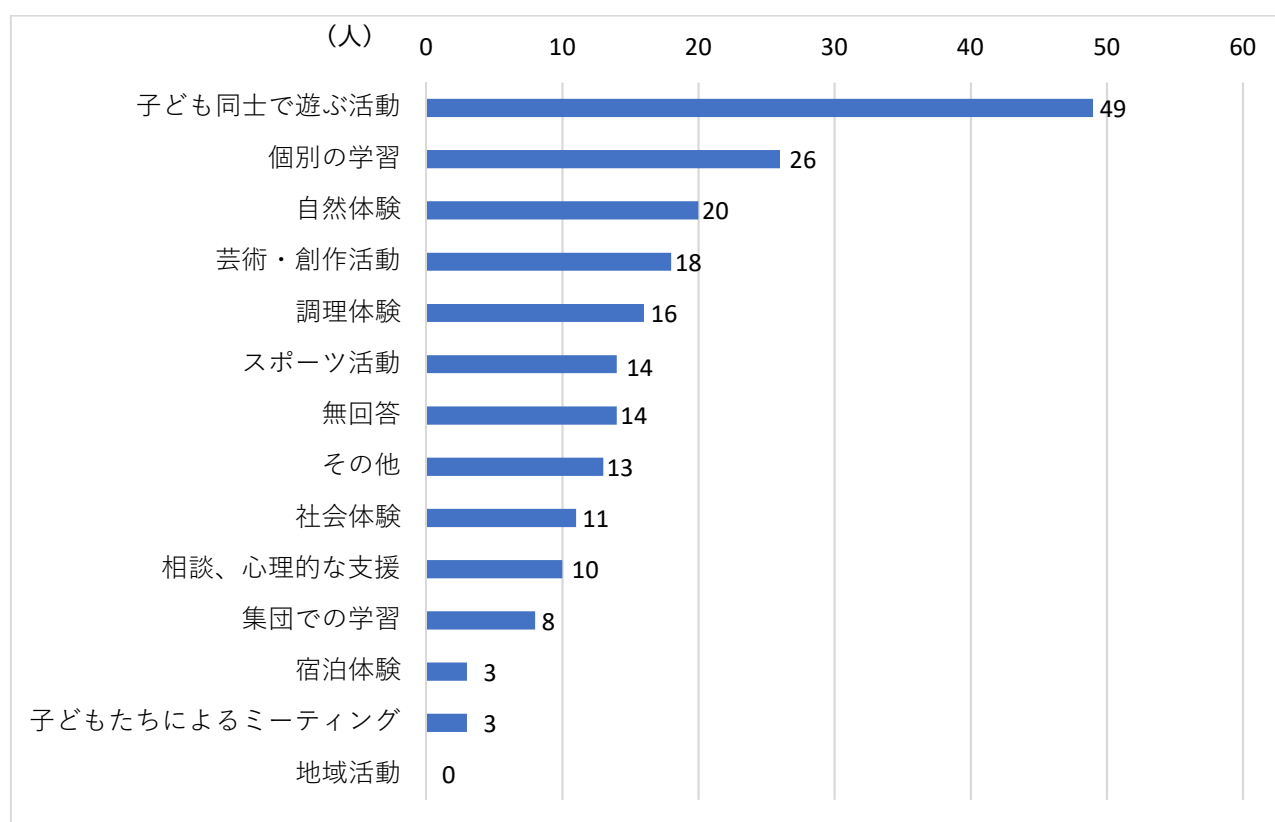


図 2-4-5 子にとって好意的な活動内容（1位）

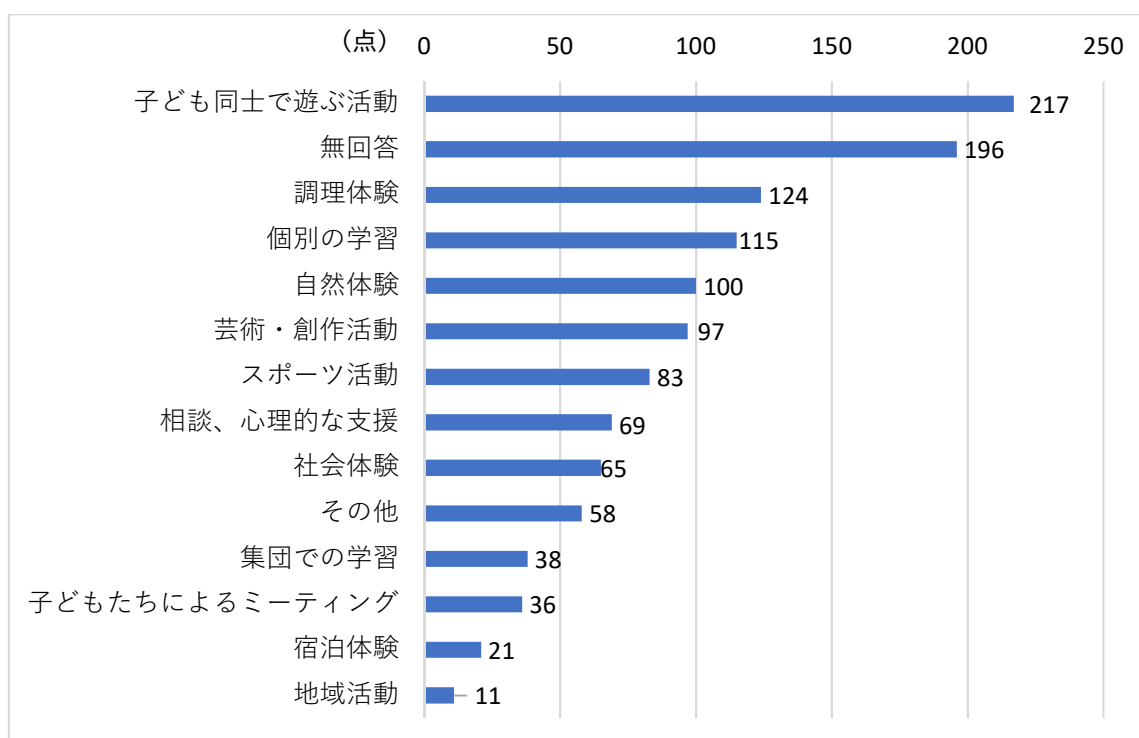


図 2-4-6 子にとって好意的な活動内容（1～3 位の得点別順位）

子にとって好意的な活動内容として、「その他」の回答内容は、表 2-4-14 のとおりとなる。

・ 特になし
・ 私（母）とスタッフさんと一緒にボードゲーム
・ 気持ちによりそうこと。考えを否定しないこと。
・ 積極的に参加する事はなかった… 毎度、嫌々私について来る感じです…
・ 子供がミニ四駆の改造に集中して取り組む中で、工具の使い方、早く走らせる為や、カーブやコーナーをコースからはずれない様にする技術を YouTube や実際のレースで大人の方に聞くなど、自分で好きな事、居場所を作っていたように感じます。親としては、「子供のやりたい」という気持ちにどうすれば答えてあげられるかと周りの方にミニ四駆の情報を聞いたり、ネットで調べて片っ端から通い続けました。
・ 季節の行事に参加したこと。
・ パソコンを使用した活動。
・ 本校にある通級指導教室で、特別に空いている時間の枠に入れてもらう事ができ、担当の先生の声かけや関わりの中で、遊びを通して子供の表情が明るくなったり、笑顔が見られたりと久しぶりに学校の中で楽しそうに話す子供の姿を見る事ができて嬉しかったです。

・自分の好きな事を自由にする時間。
・保護者が生活のリズムを整えようとしてすることは、ほとんどムダに終わるので、言わず見ざるでゲームやユーチューブなどさせただけさせました。ある程度すると、自分から何かしらやりたいと（うちは勉強を始めたい）言ってくるので、個別で塾に通い始め、少しずつやっています。放課後デイでも、PCで学習できるので取り組んでいます。心理的なものについては、心理士さんとお話をする、話を聞いてもらうのが1カ月に1回～2回、話をするのが面倒くさいと言いつつ、聞いてもらうとホッとするようです。
・行きたがらないので、施設に馴染めていない。体験ができるようになるほど行けていない。
・自分でネットで資格を見付けてきて受けてみたいと言ってきました。自分なりに変わってみようとする姿が見られるのでこのままでも良いかなと思っています。
・不登校になってからは、放デイの方で週一、空いた時間に個別の時間を設けて、将棋をする事から始めてもらって、続けている。
・興味があることのワークショップ
・プログラミングの活動
・①毎回学習内容が違い楽しく取り組めた。②通信校が行っているフリースクールだったので、進路の事を在校生にも聞いたり、コミュニケーションの機会もあり、とても良かった。
・個別でハンドマッサージを受けながらのおしゃべりにリラックスした様子で、帰宅後、私にハンドマッサージをしてくれました。
・釣り。
・個別に対応してくださり、本人のしたいことを相談しながらさせてくれる。
・お出かけ
・放課後デイサービスの先生とコミュニケーションがとれるようになった
・フリースクールの先生と沢山関わったり、話をした事。
・酸素カプセル 犬とふれあう
・興味があるコト家で魚を飼う。絵を描く道具（筆や絵の具、キャンパス）などを買って、いつでも夜中でも、一晩中でもやりたいことを、していいように環境を作った。（学校に行かなくても大丈夫。部活に行かなくても大丈夫。）
・元不登校の親子による進路相談、学習についてのお話会。
・親以外の信頼できる頼れる大人ができた。
・とにかく家庭で休ませた。祖父母が外出に連れて行ってくれた。
・来週からの利用なのでまだ分からない
・自分のストレスを感じる時はどんな時なのか自分を理解する事が出来た、対処法が分かったと思う。

・タブレット利用
・フリースクールの先生たちと話す中で大人になってからの自分を考えたりする機会ともなったようだった
・放デイで何でも積極的に取り組んでいたみたいです。すべてが楽しかったみたいです。
・施設見学とも重なるかもしれないが、外出も月に何回か企画して下さるので、市電に乗る、買い物をする、少し遠出するなど家庭では出来ない経験をさせてもらえる。また、その中で、子ども達とのコミュニケーションや集団活動でのルールなども少しずつ学んでくれている気がする。また、遠足、修学旅行的な企画されているところもあるようで、その場合は学校で出来なかった経験をさせてもらえるので、かなり有難いと思う。
・個別でその日その日に本人のしたいことを相談しながらさせてくれる。無理強いがない。
・見学のみ
・あまり活動していない。
・何もできていない 毎日、話をしたり、少しでも笑顔に出来るようにしている。
・興味がある事が出来る、強制されない
・何も動かなかったから自分でなにもかもした。学校とかやばいと思い、動いた。
・ゲーム、トランプ、など。

表 2-4-15 問 4-9 その他（自由記述）

2.4.6 施設への期待・要望

利用している施設に対して期待されている内容について、1位で最も多かった回答は「学校に代わる学習機会の確保」であった。登校先や形態は変わっても、学校同様の教育支援の提供については期待値が高いことが伺える。

また1位の項目では次点であった「特性・成長に合わせた支援の充実（発達障害等の支援を含む）」や「居場所の提供」については、2位や3位の回答でも割合が高いことから、まず学習面の支援を基本に、子どもの特性や成長を考慮に入れた居場所の提供や支援内容を求める声が大きいと結果であろう。これも他の順位を問う質問と同様に、得点化による順位づけを行なった結果から、学習面を筆頭に子どもの個人に適した支援と安心感を求める内容が明確に上位にあることがわかる。

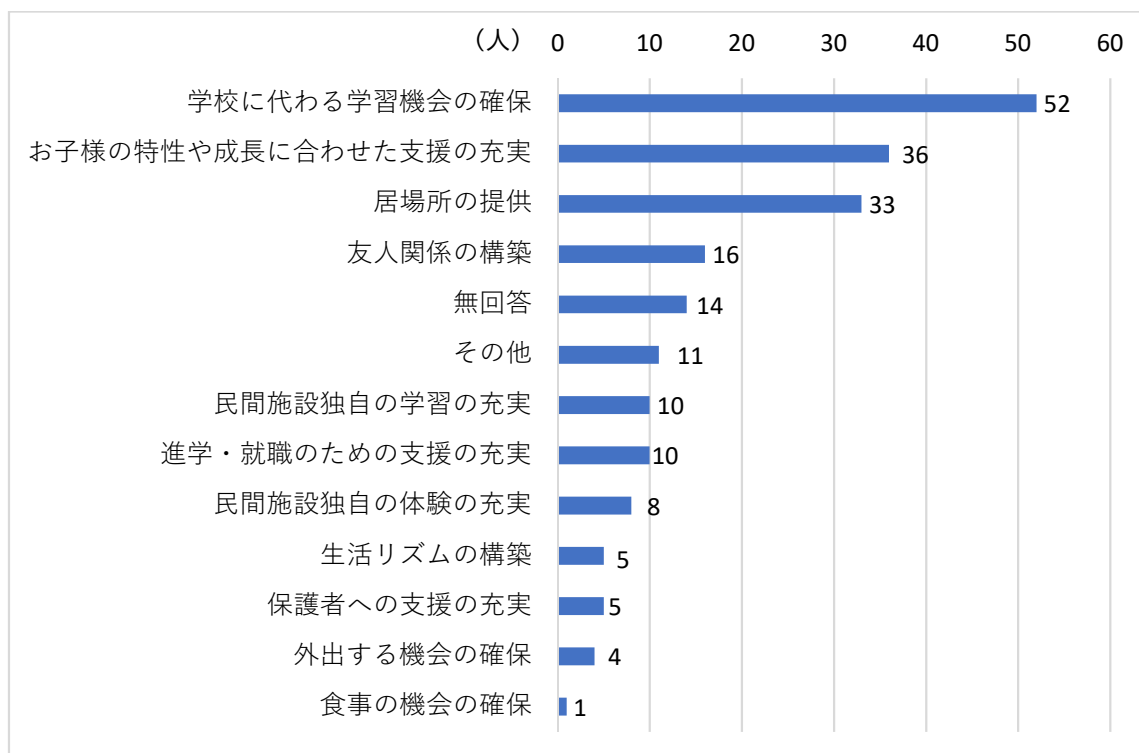


図 2-4-7 利用施設への期待（第 1 位）

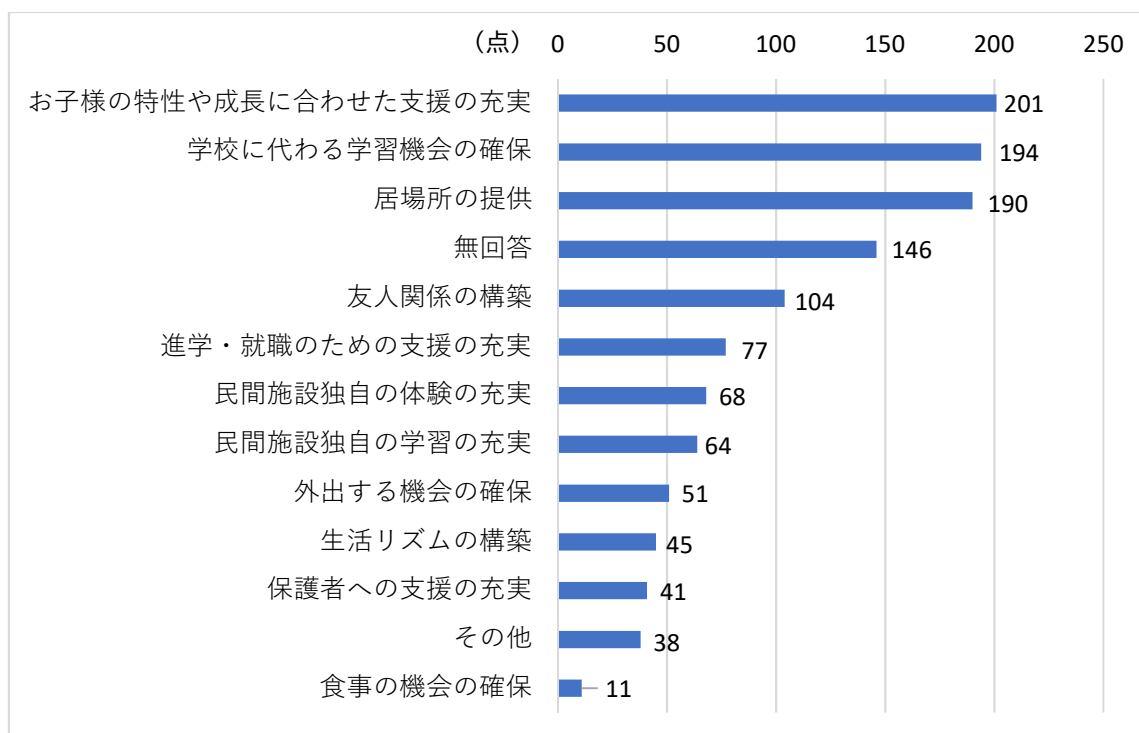


図 2-4-8 利用施設への期待（1～3 位の得点別順位）

利用施設への期待として、「その他」の回答内容は、表 2-4-15 のとおりとなる。

・資金面が常に厳しいので、何か補助があると親も学校も少し楽になるのにといつも思っています。
・とにかく費用が高く困っています。不登校になったためなんとかして、家以外の場所がようやく見つかりましたが、娘も波があり、休むことも多々あります。妻が十分に働くことが制限され、メンタル面でうつ病発症し、収入が減ってしまい、経済的に苦しいです。
・（自治体名）による利用料の自己負担をやめていただきたい。
・「学校に行くのが当たり前」という社会の方向性を見直して、子供が選べる学校教育機関が増えればいいと思います。宿題が子供はとても嫌いでした。「〇〇をしなければならぬ」に親も子供もしめつけられてしまい、「何度もやりなさい！」を繰り返していた気がします。出来る子もいれば、出来ない子もいます。学校もやってきてえらいや、何でやってこなかったのか？と優劣をつける。その時点で子供も自分はダメなんだと感じやすい気がします。学習の差で優劣をつけるよりも子供の良い部分を引き出してくれるような人がたくさんいる場所の方が子供が生き生きしているなど現在は感じます。利用している施設に対してよりも、日本の学校教育に疑問を感じています。
・事業所によっては出席扱いになること。もっと対応したところが増えると嬉しい。
・今十分にいただいているので期待というより、感謝しかありません。
・利用制限が6年生までとなっていますが、中学生まで伸ばしてほしい。
・できれば行政支援などがあり、持続することができればよかった。離島では少しはよかったのかもしれない。
・高学年、中学生になると、利用を断れるようになるので（利用者の人数の関係で）中学生に向けた施設の紹介などをしてほしかったです。
・「うちの子」に関して言えば、施設等に期待した事はなく、気分転換の1つとして。そして「心の病気」であることを自覚させるために通院していました。人と関わる事を拒絶していたので、趣味に没頭できる時間を大切に平日であっても海に魚を見に行ったり。
・学校への医学的な講話
・金額面での補助
・特性を調べる
・利用している施設は、利用料0円です。そのため、見守りの大人の経済的負担がかかってきています。運営を継続していく為にも、公的支援を必要と考えています。
・学校との連携。出張放デイやフリースクール的な企画。放デイやフリースクールなどで、細かな対応が出来るのは当たり前の事として、そのノウハウを学校運営や制度設計にも取り入れて欲しい。そして、学校側も柔軟な考え方や運営体制について検討してもらいたい。

・学校法人化してほしい。
・友人との関係を作るのが苦しい子ですので、フリースクール等の少人数でも中に入るのが苦手でした。まずは、自分の困っていること、辛いと思っていることを大人に受け止めてもらう機会が必要だったと今は思っています。1対1で、信頼できる大人と、他の人に聞かれにくい場所で話ができる場所があると安心できると思います。
・預かってくれる時間が短いので、仕事の為にはもう少し長く預かってもらえたらとても助かります。
・施設の安定した開校のために、大人の見守りの経済負担、循環が生まれる事を希望します。（補助金など）公的支援の必要があります。
・費用が高すぎる。早く補助金などの制度を整えてほしい。

表 2-4-16 問 4-11 その他（自由記述）

2.4.7.子の将来、今後について

現在は施設を利用することで居場所を確保して学習支援などを受けているが、保護者の立場から将来の方向性についてどのような意向を抱いているかについてたずねた結果が表 2-4-16 である。本調査に回答を寄せた保護者からは子どもの意思を尊重するという意識が強く伺える結果となった。

表 2-4-17 子の将来について

4-12 お子様の今後	度数	パーセント	有効パーセント
在籍校復帰	27	13.2	13.7
民間施設利用継続	25	12.2	12.7
在籍校・民間施設併用	47	22.9	23.9
子どもの意思次第	92	44.9	46.7
今は考えていない	6	2.9	3.0
無回答	8	3.9	100.0
合計	205	100.0	

2.4.8.学校に行けなくなったときに希望する支援や情報提供

ここでは相談・支援施設を利用していない回答者（146名）を対象として、子どもが学校へ行けなくなった際にどのような支援や情報提供が望まれるかについて、複数回答形式の質問を行った結果が表 2-4-18 である。

表 2-4-18 学校へ行けなくなった際の支援・情報提供（複数回答）

5-1 学校へ行けなくなった際の支援・ 提供情報内容（複数回答）	度数	パーセント	回答数 パーセント
学校の先生への相談	28	19.2	7.6
学校の先生による家庭訪問	10	6.8	2.7
スクールカウンセラーへの相談	12	8.2	3.3
スクールソーシャルワーカーへの相談	9	6.2	2.5
学校以外の勉強場所の情報提供	57	39.0	15.5
学校以外の居場所の情報提供	50	34.2	13.6
学校以外の相談場所の情報提供	30	20.5	8.2
相談可能な病院の情報提供	24	16.4	6.5
インターネットなどでの相談	10	6.8	2.7
自宅訪問による相談・支援	6	4.1	1.6
同級生・友だちからの声かけ	14	9.6	3.8
保護者同士での悩み語り合える場	20	13.7	5.4
保護者の相談場所	12	8.2	3.3
病気や障害等への理解	20	13.7	5.4
病気や障害等についての相談・支援	16	11.0	4.4
その他	12	8.2	3.3
特になし	37	25.3	10.1
合計	367	251.4	100.0

表 2-4-19 問 5-2 その他（自由記述）

- ・親が情報を探さないと居場所を見つけられなかった。市役所や学校に相談しても学校に行かなくても大丈夫、というだけで、民間の居場所等は親が必死に情報を探さないと分からなかった。
- ・親のことの支援もしてほしい。
- ・同じように不登校になまた子供さんの親とはなしたかった。
- ・相談場所が近くに全くない どこに相談していいのかわからない
- ・学校の先生が相談に乗ってくださり、家庭訪問もしてくださいました。その後も定期的な家庭訪問をしてくださってありがたいです。
- ・支援、相談先の一覧になっているものを予め提示して欲しかった。通える範囲の現実的な場所や相談先の一覧がほしかった。現実的にないものが多く、絶望している。
- ・中学生なので、今後の進路に関して心配しています。高校に関して、中学校に通えていない場合の進路はどのようなところがあるのか、情報提供があると、目標ができ、本人も進路を考えるきっかけになると思います。
- ・フリースクールへ参加するにあたり、学費の補助
- ・家族皆で様子を見ながら本人が無理のないよう声かけしています。
- ・フリースクールの選択肢が少ないので、フリースクールを増やしてくれたらありがたい。
- ・オンラインの教育機関、進路についての提案など

ここでも施設利用者と同様に「学校以外の勉強場所の情報提供」と「学校以外の居場所の情報提供」の2つに回答が集中している。学校が果たす教育機能を学校外でどのように確保するかというニーズと、学校以外でも居場所となる場の確保、相談できる場を確保するというニーズが明確に表れている。

仮定の状況ではあるが、このようなニーズを持つ保護者が既存の相談機関・支援機関を利用したいと考えているかについて質問した結果が表 2-4-19 である。

どの項目においても無回答の割合が総じて高いものの、利用希望に目を向けると、「フリースクール」の利用希望が高い（31.5%）。フリースクールは、相談・支援機関の利用経験者に対する利用の有無を尋ねた質問では、利用が多いとは言えないが、仮定として子が経験する状況において、相談や支援内容によっては選択肢としてあげられる可能性が一定程度あるということが示されている。教育機会確保法の施行により、多様な教育機会の提供という選択肢が少しでも認知されつつあることが背景にあると考えられる。

表 2-4-20 今後利用したい相談・支援機関

5-3 今後利用したい相談・支援機関	利用して みたい	利用 しない	無回答
SC	42	72	32
%	28.8	49.3	21.9
SSW	37	77	32
%	25.3	52.7	21.9
医療機関	38	70	38
%	26.0	47.9	26.0
フリースクール	46	67	33
%	31.5	45.9	22.6
放課後等デイサービス	17	85	44
%	11.6	58.2	30.1
市町村教育支援センター	16	85	45
%	11.0	58.2	30.8
鹿児島総合教育センター	6	95	45
%	4.1	65.1	30.8
市町村教育委員会	11	92	43
%	7.5	63.0	29.5
鹿児島県子ども総合療育センター	7	92	47
%	4.8	63.0	32.2
鹿児島県精神保健福祉センター	8	93	45
%	5.5	63.7	30.8
かごしま子ども・若者総合相談センター	11	92	43
%	7.5	63.0	29.5
児童相談所	14	87	45
%	9.6	59.6	30.8
子ども家庭支援センター	18	85	43
%	12.3	58.2	29.5
指定障害者相談支援事業	7	92	47
%	4.8	63.0	32.2
子ども食堂	23	79	44
%	15.8	54.1	30.1
その他	4	64	78
%	2.7	43.8	53.4

表 2-4-21 問 5-4 その他（自由記述）

- ・学校での人的資源がとてつもなく不足しているので、そこをテコ入れしない限り、根本的解決にならない。そもそも、少し特性がありそうだけど、なんとか頑張って適応している子を放っておくと、必ずそのうち不適応を起こす。40 人近くを 1 人の担任がみるのは、多様化の時代であったり、核家族化が進んでいる現代においては、家族の問題を抱えている子を抱合していくには困難であり、不可能です。
- ・リモート授業を全部の小中学校ではやく実現して欲しいし、ICT 活用を保護者にレクチャーしてくれる所があれば、それはお願いしたい(学校で対応出来ないのであれば保護者が勉強するしかない)。
- ・市町村で、学活や学年単位でのリモート授業や情報提供を行って欲しい
- ・学校の中に臨床心理士が在籍している支援室を作ってほしい。
- ・親が仕事に行けるように、キッズシッターへの利用料の補助、職場に同行してよいなど、柔軟な対応をお願いします。
- ・良いところが有るのであれば、利用したい
- ・HSC(※)についてのカウンセリングができる機関
- ・以前利用したことがあったが、母親の一人で悩んでいるのと娘との温度差がある。
- ・オンラインの教育機関
- ・今は特に必要な機関としては、無いのですが、少しでも家庭に補助金が出るように県や市に働きかけて行きたいです。
- ・保護者の交流や情報交換の場や機会（個人情報など公にしたくない難しいところも多いですが）親としてモヤモヤを抱えている人は多いと思います。
- ・保護者のカウンセリング（有料が多いので）15 分でもいいから少し話が出来る所が欲しい
- ・障害をもつ子供の親は誰にでも相談できない。（偏見の目がある）
- ・現状、どこに相談しても解決できる気がしないため選択できませんでした。
- ・不登校親の会
- ・他にどんなものがあるか分からないが、その内容によっては利用してみたいと思います。

※ HSC とは、Highly Sensitive Child の略

2.4.9.子どもが学校に行けなくなった・行かなくなったきっかけ

最後に保護者の立場から子どもが学校に行けなくなった・行かなくなったきっかけとして捉えている内容について複数回答によりたずねた結果が表 2-4-21 である。

選択肢中で高い割合を示したものが「学校に行こうとすると不安が強くなった」であり、次に「体がきつかった（頭が痛い、おなかが痛い、吐き気がしたなど）」、「朝、起きようとしても起きられなかった」が続いている。これらは子の心身に関わる内容の選択肢であり、家庭内における子の態度から、保護者として日頃より実感している内容が選ばれていると考えられる。

加えて、学校に行けない・行かない背景ともなり得る「教師や学校関係者との人間関係」や「友だち同士の人間関係（仲のいい友だちがいない、なじめないなど）」などにも回答数が集まっていることから、保護者の立場からは学校での人間関係が原因で学校に行かない・行けなくなったという意識が反映されている。

表 2-4-22 子どもが学校に行けない・行かないきっかけ（複数回答）

6-1 子どもが学校に行けなくなった・ 行かなくなったきっかけ（複数回答）	度数	パーセント	回答数 パーセント
勉強に関すること	161	23.8	6.1
学校のルールや環境（校則、クラス分けなど）に関すること	178	26.3	6.8
教師や学校関係者との人間関係	253	37.4	9.6
友だち同士の人間関係（仲のいい友だちがいない、なじめないなど）	238	35.2	9.1
いじめなどのつらい経験	121	17.9	4.6
学校の雰囲気や音、においなどが気になった	173	25.6	6.6
からだがきつかった（頭が痛い、おなかが痛い、吐き気がしたなど）	296	43.8	11.3
気持ちが落ち込んだり、イライラしたりした	183	27.1	7.0
朝、起きようとしても起きられなかった	272	40.2	10.4
学校に行こうとすると不安が強くなった	331	49.0	12.6
家庭の事情	33	4.9	1.3
家族との人間関係	31	4.6	1.2
病気やケガで入院や通院をしていた	41	6.1	1.6
よくわからない	107	15.8	4.1
特にきっかけはない	28	4.1	1.1
学校へ行く必要を感じていない	85	12.6	3.2
その他	97	14.3	3.7
合計	2628	388.8	100.0

以上のように、すべての調査結果を概観すると、保護者対象の回答結果からは、子の現状と将来を見据えて最善の相談先や支援機関を求める意識が強く伺える。より詳しくは自由記述の回答内容などを参照することになるが、量的な傾向においても、当事者としてそれぞれが抱えている事象の深刻さと、支援のリーチをもう一步求めるニーズが垣間見える結果であろうと考えられる。